



A Marimbist as Pointillist
MAKOTO NAKURA
Marimba & Vibraphone



AMR
AMERICAN MODERN RECORDINGS


SUPER AUDIO CD

日本語解説付き

バッハ・ビート マリンバ奏者：点描画家として

名倉誠人 マリンバ・ヴァイブラフォン

ヨハン・セバスチャン・バッハ (1685-1750)

1, トッカータとフーガニ短調BWV565

(原曲：パイプ・オルガン) [8:50]

第一マリンバ：名倉誠人

第二マリンバ・打楽器：名倉誠人 (多重録音)

バス・マリンバ：酒井聡

カール・フィリップ・エマニュエル・バッハ (1714-1788)

2, スペインのフォリアによる12の変奏曲

(原曲：鍵盤楽器) [7:26]

ヨハン・セバスチャン・バッハ

無伴奏フルート・パルティータニ短調BWV1013

(ヴァイブラフォン)

3, 第一楽章：アルマンド [3:44]

4, 第二楽章：コラント [2:23]

5, 第三楽章：サラバンド [2:49]

6, 第四楽章：ブーレ・アングレーズ [2:40]

無伴奏チェロ組曲第六番ニ長調BWV1012

7, 第一楽章：前奏曲 [3:59]

8, 第二楽章：アルマンド [3:06]

9, 第三楽章：クーラント [2:37]

10, 第四楽章：サラバンド [3:34]

11, 第五楽章：ガヴォットI&II [2:28]

12, 第六楽章：ジーク [3:37]

無伴奏ヴァイオリン・ソナタ第一番ト短調BWV1001

13, 第一楽章：アダージョ [4:12]

14, 第二楽章：フーガ [4:45]

15, 第三楽章：シシリアーナ [2:48]

16, 第四楽章：プレスト [3:25]

Total Time: 62:23

全ての作品は名倉誠人によって編曲されました。
録音場所をご提供くださった、ポアペール神父様と、カトリック聖ヴィアートル北白川教会 (京都市)の皆様へ、心から感謝を捧げます。

「バッハ・ビート」マリンバ奏者：点描画家として

演奏家なら誰でも、バッハの作品は、必ず登らなければならない山だ。マリンバ奏者の私にとっても、たとえバッハがマリンバのために何の作品も遺していないとは言え、その作品に触れずに終る一日は無かった。

マリンバでバッハの作品を演奏するということはつまり、他の楽器のために書かれた曲を、マリンバ用に編曲して演奏することだ。ヴァイオリン、チェロ、フルート、リュート、鍵盤楽器などのための作品を、これまで編曲してきた。

先日、地下鉄の中で、ある著名な弦楽四重奏団の一員である、D氏と乗り合わせた。「マコト、最近はどうな曲を他の楽器から『盗んで』いるんだい？」クラシック音楽の中で歴史の浅いマリンバは、そのレパートリーが限られていることが最大の悩みだ。これまでの大作曲家たちが、多くの名曲を遺している、弦楽四重奏をやっている人々には、マリンバ奏者のそんな気持ちはわからない、と言いたいのを抑えて、「バッハの無伴奏フルート組曲かな。」と答える。「そうか、バッハの作品は純粋だから、楽器を置き換えても、その価値は変わらないだろうね。」

バッハの作品では、演奏している楽器をも忘れさせて、まず、音楽そのものが私たちに伝わってくる。それぞれの楽器と、その特性を生かそうとした作曲を、具体的な作曲法と呼ぶなら、バッハの作曲は、もっと抽象的な世界から音を紡ぎ出したように思える。ここで、D氏の使った「純粋」という言葉が共鳴してくる。私が、マリンバでバッハの作品を演奏したいと思うのも、この点に集約するのだ。「何の楽器を演奏しているかより、どんな音楽を演奏しているかを聴いてほしいから。」

思えば、バッハの作品は、いかに多くのことを私に教えてくれたことだろう。

「きれいな旋律を、伴奏してもらいながら奏でる」ことに慣れた私の幼い耳に、いくつもの旋律が対等に同時進行する、多声書法は驚きだった。そして、そのいくつもの旋律線が有機的に三次元の綾を織り成す、と体得できたのは、ずっと後のことである。三次元の造形が、眼前に現れ、もつれ合い、次第に姿を変える。音楽が私たちに与えてくれる、素晴らしい芸術的瞬間だ。

アメリカ大陸で演奏活動を始めた頃に訪れた、極

寒のアイオワ州のある舞台。演奏家として何を伝えるべきなのかが、ふと見えてきたのも、ここでト短調のフーガを演奏している時だった。演奏家は、再現者ではなく創造者であるべきで、まるで舞台上で作曲家とコラボレーションをしているように演奏したい。そのためには、一つ一つの音が「自分にとって」どんな意味を持つか、深く感じる。そして、音たちが、自分の中で何か他の意味、色でも香りでも、詩の一節でも良い、を持ち始めた時、私の演奏は、最も遠くまで届き、人々の心の最も深い部分に触れることができるのではないか。

また、これまで聴衆からももらった温かい言葉の数々がなかったら、やはり、バッハを弾き続けようという気持ちにはならなかっただろう。「あなたのサラバンドを聴いて涙が止まらなかった。」という一言が、私にどれほどの勇気を与えてくれたことか。そして、その言葉をくれた人にとって、音楽がどれだけ深い意味を持つかを考えた時、私の心は、音楽の持つ偉大な力の前に、謙虚にならざるを得ない。

しかし、同時に、批評の標的となるのも、バッハを演奏した時だ。その作品の演奏には、鮮明な演奏技術はもちろん、知情意のすべてにおいて深さが求められ、演奏家としての力量、音楽性、人間性までもをはっきりと示す、絶好の機会となるからだ。また、それぞれの人が、自分なりの理想のバッハ像を、強く持っていることが多いので、その範囲をはみ出したものを受け入れるかどうか、聴く者にとっても挑戦となる。しかし、これまで受けてきた批評を考えてみると、その多くは、マリンバのトレモロ奏法に向けられたものだった。

マリンバは、一つ一つの音が長く伸びないため、長い音を演奏する時には、必ず「トレモロ」という連打奏法を使う。ほとんどの人は、このトレモロを聴いた時、まず当惑する。そこで心を閉ざしてしまい、その後私がどんな音楽を演奏しているか、まったく聴いてくれないような人たちがいる。一方で、始めは当惑しながらも、トレモロの連打、つまり点の連なりが、次第に線となるように本人も感じ出し、驚きを隠さない人々もいる。それぞれの線に込めた叙情性まで言及してくれるような人々とは、是非友達になりたいと思う。

「点の連なりを線に感じさせる」ことは、ピアノの演奏においても、常に訓練を重ねる事柄だ。ピアノはマリンバより響きは長いですが、声や弦楽器・管楽

器の作る持続音には及ばない。英国王立音楽院に留学していた時、ピアノの教授から、「その線を良く聴き、その線にとことん集中することによって」点は線となる、と学んだ。

マリンバでも、ピアノと同じように集中すれば、点は線のように聴こえてくるのだろうか？

しかし、弦楽器・管楽器奏者と室内楽を演奏する時には、いかに集中しようとも、必ずトレモロの部分が問題になってくる。「いっそ、そのトレモロをやめてしまえば？」と共演者から言われたこともしばしばだ。自分たちが持続音を演奏している時に、マリンバがトレモロをしていると、打楽器的過ぎる、音が多過ぎる、と感じ、美しい旋律線を作るのに、邪魔になると思うようだ。

また、作曲家達にマリンバのための新作を委嘱する時には、どのようにうまくトレモロを使うかを、必ず話し合う。トレモロの可能性を信じず、全くトレモロを使わないような作品にしてしまう作曲家もいるが、そんな中で、何人かの作曲家が、トレモロを生かし、見事な音楽を書いてくれたことは希望だ。ある時、マリンバ協奏曲をオーケストラと演奏していた。弦楽器セクションが演奏するなめらかな旋律線に、私がトレモロで演奏する、同じ旋律がかぶさって行く。そこで感じた劣等感、しかし一体なんだろう？何人ものヴァイオリニストたちが作っている、張り詰めた線の世界の中で、トレモロは、まるでいびつな石つぶつのように、空虚に響く。やはり、トレモロで線を作るうなんてことは、笑い種なのか？

私の、そんなトレモロのとらえ方を変えたのは、点描画家スーラの作品との出会いだ。それまで「長い音が出ないので、仕方なく」トレモロを使っていた私だったが、点描画家たちは、あえて点を使うことを選んで、線を描こうとする。その画面に現れるのは、どこか寂しげで、現実と夢をさまようようなイメージだ。実際の線を使ったのではおそらく表現できない世界が、目の前に広がっているのを見て、啓示に打たれたように立ちすくんだ。

トレモロを使って、音楽でもそんなことができるかもしれない。持続音を現実の世界とすると、トレモロの点の数々は、非現実の世界を描き出す、分子の一つ一つのようになれるかもしれない…。

私は、このCDをこう名づけよう。「マリンバ奏者：点描画家として」

森の奥でひとり歌い続ける鳥のさえずりは、誰の耳にも届かない。点と線の間には、どうしても飛び越えられない間隙がある。到達することと、到達しないことの、その間隙に潜む寂しさは、鳥の歌にも似て、私の画面に満ちる。

2007年12月 ニューヨーク・シティにて
名倉誠人

名倉誠人プロフィール

ソロ・マリンバ奏者、名倉誠人の超人的な技巧と知的で詩的な音楽作りは、この楽器の全く新しい地平を切り拓くものとして、多くの賞賛を獲得してきた。また、「我々の時代の音楽」を常に追求する姿勢は、作曲家達の共感を呼び、数多くの新作が名倉のために書かれてきている。その活動の中心である全委嘱作品によるリサイタルにより、文化庁芸術祭新人賞を受賞した。また、米国BMI財団よりBMI/サリナッチ基金マリンバ委嘱プロジェクトを任せられるなど、現代の音楽のAdvocate（主張・代弁者）という彼の姿が明らかになってきている。

権威あるヤング・コンサート・アーティスト国際オーディション（ニューヨーク）に、マリンバ奏者として史上初めて第一位優勝、ニューヨークとワシントンでのデビュー・リサイタルに続き、カーネギー・ワイル・ホールをはじめ、全米40州でリサイタルを行っている。また、ニューヨーク室内交響楽団、シカゴ・シンフォニエッタ、カリフォルニア交響楽団等、全米で数多くのオーケストラと協奏曲を演奏し、熱狂的なスタンディング・オベーションで応えられている。室内楽の分野でも、アメリカ各地の音楽祭で、様々な楽器奏者と共演を重ねている。

異分野の芸術とのコラボレーションにも積極的に取り組んでいる。アメリカン・バレエ・シアターとの共演では、新作バレエ『Marimba』の独奏マリンバを演奏、ニューヨークで初演した。チリの詩人、ネルーダの詩の朗読との共演、『海の呼びかけ』は、NHKテレビにより全国に放映された。小泉八雲の『青柳ものがたり』を、イメージ投影と音楽で綴る企画

は、ニューヨークと日本で上演された。また、戦後アメリカ絵画に啓発され、名倉のために書かれた音楽を、絵を投影しながら演奏とトークを行う、『美術と音楽の出会い場所』と題する演奏会を、兵庫県立美術館と共同で制作した。

彼は音楽教育にも力を注ぎ、アメリカ全土で数十万人の子供のために演奏してきている。彼のプロフィールとこうした活動は、CBSテレビの「Sunday Morning」で全米に放送された。

日本においては、1990年に関西フィルとのコンチェルトで、ソロイストとしてデビュー、その後、東京文化会館、大阪イシハラホール等、全国各地で多くのリサイタルを行っている。サントリーホールでは二回の「全委嘱作品によるリサイタル」を開催した。第一回松方ホール音楽賞大賞を受賞。

英国や韓国、香港でも多くの演奏活動を行っており、2000年には、英国王立音楽院より、栄誉、ARAMが名倉に与えられた。

名倉は神戸に生まれ、8歳の時からマリンバを始めた。武蔵野音楽大学、同大学院、そして英国王立音楽院で学んだ。

米国Kleos Classicsレーベルよりすでに発売中の、2枚のCD、「Ritual Protocol」(KL5116)と「Triple Jump」(KL5133)は、名倉のために作曲された10曲を世界初録音で収めたものである。また、日本のALMレコードからは、やはり全作名倉のために作曲された、「田辺恒弥マリンバ作品集」CDがリリースされている。

www.makotonakura.com

酒井聡プロフィール（トラック：1）

東京芸術大学付属高校を経て、同大学打楽器専攻卒業。高橋美智子氏に師事し多大な影響を受ける。1972年パーカッション・グループ72の結成に参加。1996年マリンバ+トランペットによるEnsemble・A・Cordéを結成、主宰する。日本木琴協会特別会員。

マリンバ：サイトウMSK-5500（トラック1、7-12）、サイトウMSW-3800（1）、マッサーM450グラッド・ソロイスト（2、13-16）

ヴァイブラフォン：マッサーM55プロ・ヴァイブ
グロックンシュピール：サイトウSG-120

© & © 2016 American Modern Recordings, a division of Lumiere Records, Inc. Unauthorized duplication is a violation of applicable laws. Made in the U.S.A.
This album originally released on Kleos Classics, a division of Helicon Records, Ltd., catalog number KL5147.
SACD, DSD and their logos are trademarks of Sony.

BACH BEAT

A Marimbist as Pointillist

MAKOTO NAKURA

Marimba and Vibraphone

Johann Sebastian BACH (1685-1750)

1, TOCCATA AND FUGUE IN D MINOR, BWV 565 (originally for organ) 8:50

Marimba I: Makoto Nakura

Marimba II and Percussion: Makoto

Nakura (Over-dubbed)

Base Marimba: Satoshi Sakai

Carl Philipp Emanuel BACH (1714-1788)

2, 12 VARIATIONS ON THE FOLIA OF SPAIN (originally for keyboard) 7:26

J.S. Bach

SOLO FLUTE PARTITA IN A MINOR, BWV 1013 FOR VIBRAPHONE

3, I, Allemande 3:44

4, II, Corrente 2:23

5, III, Sarabande 2:49

6, IV, Bourree Anglaise 2:40

CELLO SUITE NO.6 IN D MAJOR, BWV 1012

7, I, Prelude 3:59

8, II, Allemande 3:06

9, III, Courante 2:37

10, IV, Sarabande 3:34

11, V, Gavotte I & II 2:28

12, VI, Gigue 3:37

SOLO VIOLIN SONATA NO. 1 IN G MINOR, BWV 1001

13, I, Adagio 4:12

14, II, Fuga 4:45

15, III, Siciliana 2:48

16, IV, Presto 3:25

Total Time: 62:23

All pieces were transcribed by Makoto Nakura.

Recorded: St. Viator Kitashirakawa Catholic Church,
Kyoto, Japan: April 9-11, 2007

Recording Producer & Director: Jiro Irima

Balance Engineer & Editor: Jiro Irima

Mastering Engineer: Atsuo Fujita

Edited and Mixed down at: Studio Armaddilo

Mastered at: Wonder Station Mastering Room

Marimbas: Musser M450 Grand Soloist (Tracks 2, 13-16),

Saito MSK-5500 (1, 7-12), Saito

MSW-3800 (1)

Vibraphone: Musser M55 Pro-Vibe

Glockenspiel: Saito SG-120

This CD was made possible partly by generous support from
the Vinas Corporation and Mr. Arthur V. Neis.

Special thanks to Father Yves Boisvert, St. Viator Kitashirakawa
Catholic Church, and its congregation for offering the
cathedral for this recording.

Cover Oil Painting by Kazuo Ooka

Package Design: Designing Heads

Design for Digital Book: Pat Burke

BACH BEAT A Marimbist as Pointillist

Bach's music is the highest mountain for all musicians to climb. Even though Bach didn't write any pieces for the marimba, I have not spent a single day without playing his music from my own transcriptions of Bach's works for violin, cello, flute, lute, and keyboard.

One day on a subway train in New York, I ran into a friend who is a violinist in a famous string quartet. "So, what pieces have you been 'stealing' from other instruments these days?" he enquired. Being newcomers to classical music, marimbists have been working hard to create new repertoire by commissioning new works as well as transcribing works for other instruments. I almost retorted that perhaps he wouldn't understand how difficult it is to have a limited body of repertoire, because many great composers have written wonderful pieces for string quartet. But, instead of saying that, I just answered "Maybe Bach's Flute Partita." Then, I was glad to hear him say "I see. Bach's music is so pure that it wouldn't lose anything even if it were played on a different instrument."

Since Bach's music can engage the mind so intensely, it almost lets us forget which instrument is being played. Many composers write pieces in a way that utilizes the characteristics of instruments. I would call this a "concrete" way of composing. But, Bach's music sounds as if he wove notes from a more "abstract" world. This is when the word "pure," that my violinist friend used, begins to resonate. The reason I want to play Bach on the marimba comes to this - I would like people to listen to the music I am playing rather than to what instrument I am playing.

Bach's music has taught me so many things... When I was a child, my ears were accustomed to listening to a pretty melody with an accompaniment where we can clearly hear a dominant figure above the others. But,

Bach's music brought me polyphony, something much more complex. I was excited to follow many melodies proceeding simultaneously. Each melody has equal importance and the interaction among the melodies moves the music forward. Much later I started to realize that many lines weave organic, three dimensional structures. The structures appear before you, each line interacting with others, gradually changing their shapes- This is the brilliant artistic moment that polyphonic music gives us.

I will always remember a concert I gave in chilly Iowa early in my US career. It was on that stage that I began to see how I, as a performer should communicate with the audience, and that happened while I was playing the G Minor Fugue. I think performers have to be creators too, and I want to perform as if I were collaborating with composers on the stage. To do that, I thought I had to feel deeply what each note means to me. When each note starts having some special meaning for me - it can be a color, scent, or even a word from a poem- maybe my playing can reach the furthest corner, and touch the deepest part of people's minds.

I wouldn't have been able to keep playing Bach in concerts if I hadn't been supported by many encouraging comments from the audiences. Comments such as "I couldn't hold back my tears while you were playing the Sarabande" make me feel very humble when I think about the great power of the music and how deeply this music affected another person.

However, it is when I play Bach that I become the target of criticism. Playing Bach requires not only the cleanest technique, but also the depth of your intelligence, emotion, and mental capacity. It is an occasion when you reveal your musicianship, the qualities you possess as a

performer, and ultimately, your humanity. Also, as each listener often has his own criterion of ideal Bach performance, it becomes a challenge for listeners, as well, to accept playing that differs from what they are used to.

Invariably, the criticism focuses on marimba tremolo technique.

Since the marimba's sound fades away quickly, when we want to play long notes, we always use the tremolo technique which consists of hitting the same note in rapid repetition. Some listeners find tremolos disturbing to the extent that they find it difficult to hold on to the context of the music I am playing. Others, although they find tremolos surprising at first, gradually see that the notes of a tremolo become the points of a line. Some people have said they found the lyrical quality of each line, and those are the people who give me hope.

In piano pedagogy, they also put a particular emphasis on how you make a line by playing a series of notes.

Although the piano's sound stays sustained much longer than the marimba's, it still cannot match the sustained sound created by voice, strings and wind instruments. While studying at the Royal Academy of Music in London, I learned from a piano professor that if I listened to the line intently and put utmost concentration on it, a series of points would start to sound like a line.

Would it be possible to do the same thing on the marimba? Well, sometimes it succeeds, and sometimes it doesn't.

When I play chamber music with string and wind players, the places I play tremolos tend to cause problems. My colleagues have often asked me "Why don't you just quit the tremolos?" For them tremolos sound too percussive, and simply too busy to make a beautiful lyrical line, and spoil the sustained sound they are making.

When I commission new pieces from composers, we always discuss how we can use tremolos effectively in the pieces. Some composers remain unconvinced by the possibility of tremolos, and they prefer to exclude them completely. On the other hand, a number of composers have written me wonderful music, taking advantage of the unique expression tremolos make. This fact gives us, marimbists, so much hope.

Some time ago I was playing a marimba concerto with an orchestra. The whole string section was playing smooth melody lines, and I joined them with my tremolo line. But, what was this sudden sense of inadequacy that hit me at that time? In the tense soundscape of lines created by many string players, my tremolos sounded misplaced as if I were throwing distorting pebbles into the lines. Is it really feasible to make a line with tremolos?

It was only when I encountered the paintings of French pointillist Seurat that I recovered my faith in tremolos. Before then, I thought I had no other choice but to play tremolos for long notes, and often did so reluctantly. But, pointillist painters like Seurat dare to choose points, in order to simulate lines. On their canvases we see somewhat lonely images straying between dreams and the real world. Seurat's paintings struck me with the revelation that this unique expression cannot be created by using real lines.

I want to bring about the same effect in music by using tremolos. If I describe sustained sound as a brush stroke to paint the real world, perhaps the many points of tremolos could become molecules to draw the surreal world...

And so I have called this CD "A Marimbist as Pointillist."

The singing of a lone bird in a deep forest cannot reach anyone's ears. There is an impossible gap to cross over

between points and lines. The loneliness hovering in the crevice of reachable and unreachable, akin to the bird singing, spreads over my canvas.

*Makoto Nakura
December, 2007 in New York City*

MAKOTO NAKURA, marimbist

Makoto Nakura is a musician whose artistry and astonishing virtuosity has been mesmerizing audiences all over the world. He creates innovative programs of new music as well as traditional classical repertoire, revealing the versatility and expressive range of the marimba while enlightening and entertaining the listener.

In 1994, Makoto Nakura moved from his native Japan to New York City, becoming the first marimbist to win First Prize in the prestigious Young Concert Artists International Auditions. In the U.S., he has performed for audiences in 40 of the 50 states with orchestras such as the New York Chamber Symphony, the Chicago Sinfonietta and the California Symphony. As a recital soloist, his long list of appearances includes Carnegie's Weill Recital Hall, New York's 92nd Street Y and Washington's Kennedy Center. In addition, Mr. Nakura has been a guest artist with the Chamber Music Society of Lincoln Center and appeared in many music festivals as a chamber musician.

He also has been developing collaborative works with other art forms. With the American Ballet Theatre, he has performed numerous occasions in New York City, including appearances at City Center, where he was soloist in a new production of "Marimba." With the spoken word, he commissioned and premiered Carlos Sanchez-Gutierrez's "The Ocean Calls" based on poems by Pablo Neruda. With story-telling image projection, he created "The Story of

Aoyagi" which is a venerable Japanese ghost story.

In September 2007, he produced a concert called "The Encounter of Art and Music" with the Hyogo Prefectural Art Museum in Japan; he played pieces inspired by Paul Klee, Jackson Pollock and others with projections of their paintings.

Mr. Nakura has established himself as a dedicated champion of the music of our time. Many leading composers have written pieces especially for him. This marimbist's mission is to explore and expand the possibilities of the instrument, demonstrate what an exciting and provocative vehicle it offers to composers, and provide a thrilling experience for audiences.

Born in Kobe, Japan, Mr. Nakura began to play the marimba at the age of eight. He studied at Musashino College in Tokyo and at the Royal Academy of Music in London. Indeed, because of his strong commitment to reaching younger audiences, he conducts many master classes and workshops at schools such as the Eastman School of Music and the Royal Academy of Music, among many others.

His recent honors include a National Arts Festival Award from the Japanese Agency of Cultural Affairs and the BMI/Carlos Surinach Fund Marimba Commission. He was named an Associate of the Royal Academy of Music in London. His two CDs from American Modern Recordings ("Ritual Protocol" and "Triple Jump"), and "Tsuneya Tanabe Marimba Works" on Japan's ALM Records, are devoted to works written especially for him.

A network television portrait of Mr. Nakura was broadcast across the U.S. on CBS Sunday Morning. His recitals have been widely televised by KBS (Korea) and NHK (Japan) and played on many radio stations.

makotonakura.com

Satoshi Sakai (Track 1)

Mr. Sakai graduated from the Tokyo National University of Fine Arts and Music, where he studied under Michiko Takahashi. He is a founding member of "Percussion Group 72" which has been the foremost percussion ensemble in Japan since its founding in 1972. In 1996, he founded a chamber ensemble, consisting of marimbas and a trumpet called "Ensemble A Corde," of which he is the music director. He also holds a special membership in the Japanese Xylophone Association.



AMR
AMERICAN MODERN RECORDINGS
americanmodernrecordings.com

© & © 2016 American Modern Recordings, a division of Lumiere Records, Inc. Unauthorized duplication is a violation of applicable laws. Made in the U.S.A.
This album originally released on Kleos Classics, a division of Helicon Records., Ltd., catalog number KL5147.
SACD, DSD and their logos are trademarks of Sony.

BACH BEAT A MARIMBIST AS POINTILLIST

MAKOTO NAKURA MARIMBA AND VIBRAPHONE

Johann Sebastian BACH (1685-1750)

1. TOCCATA AND FUGUE IN D MINOR, BWV 565
(originally for organ) 8:50

*Marimba I: Makoto Nakura
Marimba II and Percussion: Makoto Nakura (Over-dubbed)
Base Marimba: Satoshi Sakai*

Carl Philipp Emanuel BACH (1714-1788)

2. 12 VARIATIONS ON THE FOLIA OF SPAIN
(originally for keyboard) 7:26

J.S. Bach

SOLO FLUTE PARTITA IN A MINOR, BWV 1013 FOR VIBRAPHONE

3. I, Allemande 3:44
4. II, Corrente 2:23
5. III, Sarabande 2:49
6. IV, Bourree Anglaise 2:40

CELLO SUITE NO.6 IN D MAJOR, BWV 1012

7. I, Prelude 3:59
8. II, Allemande 3:06
9. III, Courante 2:37
10. IV, Sarabande 3:34
11. V, Gavotte I & II 2:28
12. VI, Gigue 3:37

SOLO VIOLIN SONATA NO. 1 IN G MINOR, BWV 1001

13. I, Adagio 4:12
14. II, Fuga 4:45
15. III, Siciliana 2:48
16. IV, Presto 3:25

Total 62:23

AMR1044



SUPER AUDIO CD



SUPER AUDIO CD

The recording was made using Pyramix Virtual Studio. It's a 24 bit resolution recording sampled at 88.2kHz, and using Polyhymnia's specially engineered mic-amps originally developed for Philips Classics in Holland. It was monitored on B&W Nautilus loudspeakers.

DDD

DSD
Direct Stream Digital

Stereo
Multi-ch

This Stereo/Multichannel Hybrid SACD can be played on any standard compact disc player.

COMPACT
disc
DIGITAL AUDIO

